

公開セミナー

「自閉症児のためのABAホームセラピーーわが子のために親ができることー」

第一日

主催 NPO法人 つみきの会

2008年6月14日 名古屋

講師 藤坂龍司（つみきの会代表）

1. ABAとは何か

○自己紹介

藤坂龍司。48才。兵庫県明石市在住。臨床心理士。NPO法人つみきの会代表。

1997年、娘が2才の時「自閉傾向」と診断される。キャサリン・モーリス「わが子よ、声を聞かせて」を通じてABA早期家庭療育を知り、妻と二人でわが子に実施。言葉の獲得に成功する。

2000年、つみきの会設立。以後、ABA早期家庭療育の普及に努める。

○NPO法人つみきの会

ABA早期家庭療育を実施する自閉症児の親と療育関係者の会。2000年6月発足。本部、兵庫県明石市。全国におよそ800人の会員がいる。札幌、東京、新潟、北陸、名古屋、大阪、神戸、福岡に支部。2008年4月、日本発達障害支援ネットワーク（JDDネット）の正会員に。

○ABAとは

応用行動分析（Applied Behavior Analysis）の略称。「行動療法」とも呼ばれる。精神分析などと並んで、臨床心理学の有力な潮流の一つ。「強化」「消去」などの人間の行動の基本原理を、様々な分野に応用し、成果を上げている。特に自閉症を始めとする発達障害児の療育に高い効果を上げ、近年ますます注目されつつある。心の内面ではなく、外に現れる具体的な行動に着目してその改善を図るのが特徴。

○ABA早期家庭療育

別名、ロバース法。早期集中行動介入（EIBI）。2～4才程度の自閉症幼児に対して、ABAに基づく個別療育を、主に家庭で実施するもの。

米UCLAのロバース（O.I.Lovaas）博士が中心となって開発。ロバース博士は1970年から2～3才の自閉症児19人に対して、週40時間のABA家庭療育を2年以上に渡って実施。6～7才の再検査で、19人中9人（約47%）が知的に正常になり、かつ付添なしで小学校普通学級に入学したことがわかった。そのうち8人は、成人になった現在も、普通の社会人として生活を営んでいるとのこと。

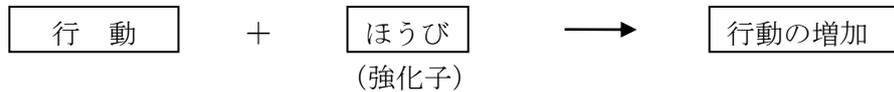
ロバース法は、理想的には週20～40時間の1対1の家庭療育を実施しながら、徐々に健常児の集団の中に（当初はABAセラピストが付添って）入れていく。

しかしつみきの会の親たちは、平均週10時間程度の家庭療育を、単独で、あるいはセラピストの援助を借りて実施している。

○ABAの基本原理

「人の行動を本当に左右するのは、行動の前に起こることではなく、あとに起こること、つまり結果である」

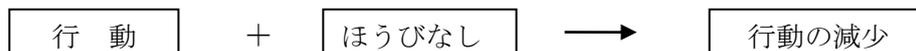
(1) 強化



人の何らかの行動の直後に、その人にとってほうびとなる刺激が与えられると、以後、その行動は増加する。このプロセスを「強化」という。ほうびとなる刺激を「強化子」という。

例：テレビをつけるとおもしろい番組をやっていた → 以後、テレビを見るが増えた

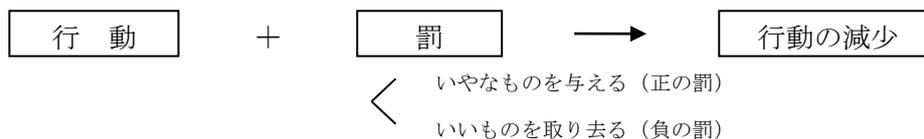
(2) 消去



人の何らかの行動の直後に、何のほうびも伴わないと、以後、その行動は減少する。これを「消去」という。

例：テレビをつけてもおもしろい番組をやっていない → だんだんテレビを見なくなる

(3) 罰



人の行動の直後にいやなもの（嫌悪刺激）を与えたり、いいもの（ほうび）を取り去ると、以後その行動は減少する。これを「罰」という。

例：テレビを見ると、おそろしいホラー番組をやっていた → 以後、テレビを見なくなった

正の罰の例：しかる、たたく

負の罰の例：ゲームを取り上げる、テレビを消す、退場処分、罰金

2. 問題行動への対処

○問題行動

本人の社会適応の妨げになったり、周囲に迷惑をかける行動。

例：かんしゃく、こだわり、他害、いたずら、破壊行動、自傷、
多動、偏食、自己刺激（手をひらひら、奇声など）

問題行動を強化している四大原因・・・①要求の実現、②回避、③注目、④感覚刺激

○問題行動への対処法の基本

- ・問題行動が何によって強化されているか、を見つけ出し、それを取り除く（消去）
- ・問題行動に代わる適切な行動を促し、それを強化する（DRO）

○かんしゃく

<かんしゃくを強化しているもの>

事前の状況	行動	結果
要求を通らない →	かんしゃく	→ 要求が通る
かまってもらえない →	かんしゃく	→ かまってもらえる



要求の実現や回避、注目によって強化されている

<対処法>

子どもがかんしゃくを起こしても、子どもの要求に応じない。声をかけない。叱らない。
安全だけ確保して、あとは無視する。こちらのやらせようとしたことは、体に手を添えてでもあくまでやらせる。かんしゃくが完全に収まったら、やさしく声をかける

○他害行為

<他害行為を強化しているもの>

事前の状況	行動	結果
要求を通らない →	攻撃する	→ 要求が通る
いらいらする →	攻撃する	→ すかっとする



要求の実現、回避、攻撃の快感などによって強化されている

<対処法>

- ・大人への攻撃は、なるべく無視して消去した方がよい。
例：セラピー中に嘔んだり、ひっかいたりしてきても、阻止するだけで、しからない。反応しない
- ・子どもへの攻撃は、無視できないことが多い



①軽い罰の使用

- ・その場で、手をつかんで1分間、動けないようにする
- ・タイムアウト（部屋の隅または別室に連れて行き、そこで1～数分間立たせる）

②攻撃していないときに、適切な関わり方を教えて、それを強化する

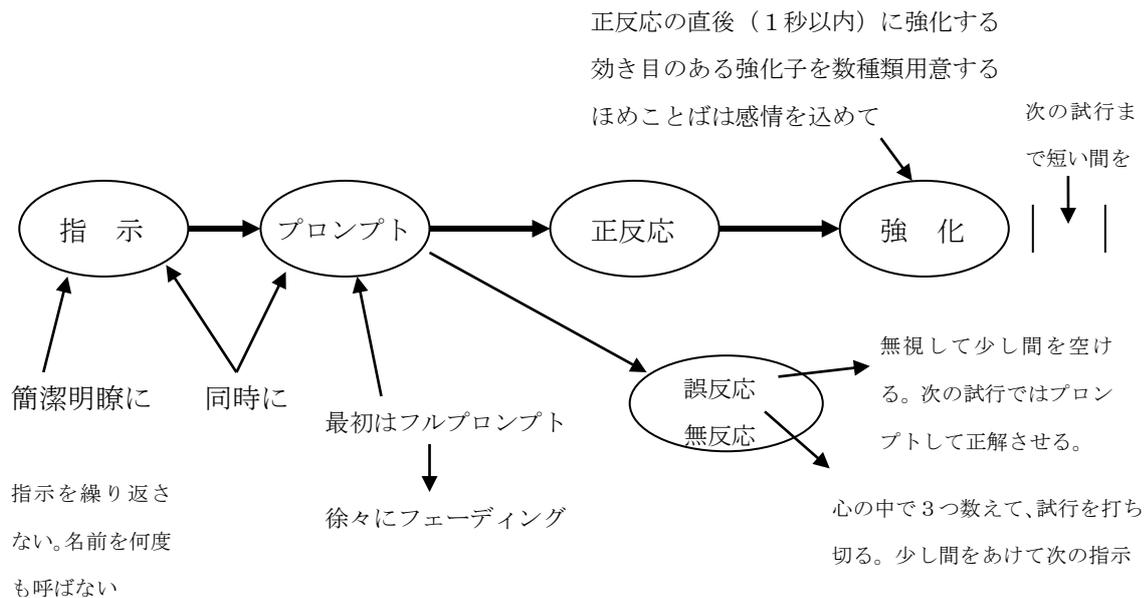
3. 教え方の基本

- ・スモールステップ
- ・プロンプト
- ・強化

- ・教えたことを細かくかみ砕き、とことん簡単なことから教え始める。
少しずつステップアップする。
- ・子どもを試さない。わかっていないことを前提にして、最初はヒントを出しまくり、確実に正解させ、強化する。そのあとで、ゆっくりプロンプトを減らしていく（プロンプト・フェーディング）
- ・何かを教えるときは、まず魅力のある強化子を用意する。強化子がないときは教えるな！
プロンプトして正解させ、すばやく（0.5秒以内に）強化

○ディスクリート・トライアル（不連続試行）

指示→反応→強化のサイクル（1試行）を短い間を開けて断続的に繰り返すこと。



○ランダムローテーション

複数の指示や物を区別させるときは、「ランダムローテーション」という方法を用いる。

例：「リンゴ」と「バナナ」の名前の区別

リンゴ、リンゴ、バナナ、リンゴ、バナナ、バナナ、リンゴ、バナナ、リンゴ、リンゴ、リンゴ・・・のように、不規則（ランダム）に二つの名前のどちらかを言い、言った方を選ばせる。最初はプロンプト。徐々にフェーディング。プロンプトなしで、10試行中9試行以上正解するまで続ける。

○シェイピング

目指す行動がすぐには引き出せない場合、まずは現状で目標に少しでも近い行動を当面の目標に選ん

で、それを強化する。その行動が増えてきたら、目標を少しずつ引き上げ、徐々に目標に接近する。

例：音声模倣

最初は、すべての発声を強化。徐々にこちらのいう音に近い音だけを選んで強化する。

○般化

一つの場所、一人の人、一つの教材でできたことは、必ずほかの場所、ほかの人、ほかの教材でもできるように、練習する。

例：一つのコップで「コップ」と言えたら、すぐにほかのコップでも練習する。

4. 初期のプログラム

少なくとも1日1～2時間は、家庭療育の時間を確保する。

できるだけ専用の部屋を用意。気が散りそうなものは片づけておく。ただし強化子用のおもちゃや、小休憩の時に遊ばせるおもちゃ・遊具などは用意する。

1回のセッションは45分～1時間程度にして、一つの課題を5分程度やっては1～2分の短い休憩を挟んで、次の課題・・・と言う風に進行する。2セッション続けて行なうときは、一セッションごとに10分程度の長い休みを取る。

○超初期課題

弁別（見分け、聞き分け）の必要のない、ごく簡単な課題から始める。

例：①「入れて」と言いながら、小さなつみきを手に持たせ、おわんに入れさせる

②「ぺったん」と言いながら、マグネットを手渡して、金属のボードに貼らせる

③物を握らせてから、「ちょうだい」と言って手を出し、その物を手のひらの上に置かせる

○マッチング

同じ物同士一緒にする課題。

例えば、全く同じおわんとつみきを1対ずつ用意する。

テーブルの上に、おわんとつみきを、互いに20cmほど離して、子どもから等距離に置く。

「いっしょにして」と言いながら、おわんを子どもに手渡し、テーブルのおわんの上に重ねさせる。

同じく、「いっしょにして」と言いながら、つみきを手渡し、テーブルのつみきの上に重ねさせる。

おわんとつみきをランダムに手渡し、ランダムローテーションを実施。

おわんとつみきだけでなく、いろいろなものでマッチングを。

最初は重ねられる物で。重ねられない物は、そばに置かせる。

最初は全く同じ物で。慣れてきたら、ちょっと違いがあっても、共通点に着目して、一緒にできるように（赤いつみきと黄色いつみきなど）

○動作模倣

「こうして」と指示を出し、大人の動作をまねさせる。

最初は、大きな身振り（片手を上げる、拍手するなど）から。

例：片手を上げる

「こうして」と言いながら、大人が左手を上げる。同時に子どもの右手を取って上に上げさせる。ただちに強化する。これを繰り返しながら、徐々にプロンプトを減らしていく。例えば手を握って上に上げさせるのではなく、肘を軽く押し上げるようにする。

最初の二つの動作を教えたら、必ずランダムローテーション。

その後、新しい動作を教えるたびに、既存のレパートリーとランダムローテーションを行なう。

○音声指示

簡単な言葉の指示に応えさせる。

「ハイ」で手を上げる。「パチパチ」で拍手をする、など。

例：「ハイ」で手を上げる

大人が「ハイ」と言う。ただちに子どもの右手を持って、上に上げさせる。あるいはすでに動作模倣ができるのであれば、大人が手を上げて見せて、まねさせる。ただちに強化。これを繰り返しながら、徐々にプロンプトを減らしていく。「ハイ」と大人が言っただけで手を上げられるようになるまで続ける。

☆☆最初の1～2ヶ月は、マッチング、動作模倣、音声指示の初期三大課題を中心に行ないながら、指示に素直に従う姿勢（コンプライアンス）を育てていく。そのためには、かんしゃくなどの問題行動は無視して消去する一方、適切な行動を促して、どんどん強化していく。大人の許可なしに、勝手に席から立たせないようにする。その代わりに、10～15 試行に一度は立たせるように心がける。大人が主導権を握る。

数分間、勝手に席から離脱することなく、指示によくしたがって、前向きに課題に取り組めるようになったら、音声模倣、物の名前付けなどの課題に進む。